

教材研究と教材の扱い方 (7)

—「先帝身投げ」(平家物語 卷十二)—

菅 原 敬 三

平家物語の「先帝身投げ」(卷十二)を取り上げたい。
本文は次の通りである。

二位殿は、このありさまを御覧じて、日ごろおぼしめし設けたることなれば、鈍色のふたうきぬ二衣うち被き、練ねり袴ばかまの稜そば高くはさみ、神璽しんじをわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主上をいだし奉つて、「わが身は女なりとも敵の手にはかかるまじ。君の御共に参るなり。御ころざし思ひまゐらせたまはん人々は、急ぎ続きたまへ」とて、船ばたへ歩み出でられけり。

主上、ことしは八歳にならせたまへども、御年のほどよりはるかにねびさせたまひて、御かたちうつくしく、あたりも照り輝くばかりなり。御髪おんぐし黒うゆらゆらとして御背中過ぎさせたまへり。あきれたる御さまに

て、「尼ぜ、われをばいづちへ具してゆかんとするぞ」と、仰せければ、いとけなき君に向かひ奉り、涙をおさへ、申されけるは、「君はいまだ知らしめされさぶらはずや。先世ぜんぜの十善戒行の御力によつて、いま万乗の主と生まれさせたまへども、悪縁に引かれて御運すでに尽きさせたまひぬ。まづ、東に向かはせたまひて、伊勢大神宮に御いとま申させたまひ、その後西方浄土の来迎にあづからんとおぼしめし、西に向かはせたまひて、御念仏さぶらふべし。この国は心憂き境にてさぶらへば、極楽浄土とて、めでたき所へ具しまゐらせさぶらふぞ」と泣く泣く申させたまひければ、山ほと色の御衣ぎよいにびんずら結はせたまひて御涙におぼれ、小さくうつくしき御手を合わせ、まず東を伏し拝み、伊勢大神宮に御いとま申させたまひ、その後、西に向かはせたまひて御念仏ありしかば、二位殿やがていただき

奉り、「波の下にも都のさぶらふぞ」と慰め奉って、
千尋の底へぞ入りたまふ。

二

この教材は、長い間教科書に採用され、教材としての価値も非常に高い。平家が戦に負け、平清盛の妻であった「二位殿（二位の尼）」が幼い安德帝に死の決意を促す場面である。以下、教材研究を深めたい。

「このありさま」とは、平家滅亡の様子のことであり、具体的には「中納言殿、いくさはいかにやいかに」と口々に尋ねる女房達に向かって、中納言平知盛が「『めづらしきあづま男をこそ御らんぜられ候はんずらめ』とて、からくと、わらひ給へば」の場面を受けている。いよいよ平家滅亡の時が来たと覚悟する「二位の尼」は、「日ごろおぼしめし設けたることなれば」何に配慮し何をすべきかの決断は速い。

彼女の配慮は、細かくしかも広範囲である。次の四点に絞ることができる。

服装を整えること

帝位の象徴である神璽と宝剣を海底に移し奉ること

安德帝をいだし奉り海底に移し奉ること

帝に忠誠を捧げ奉る人々に行動を共にするよう呼び掛け

ること
である。

「鈍色の二衣」とは、「縹色はなだいろ（淡青）に墨を入れた色（喪服に用いる色）の二枚重ねの衣」で、死出の旅を意識しての着物である。「練袴の稜高くはさみ」とは、「袴の脇を結びの紐に深くはさみこみ、長袴の裾がじゃまにならぬようにする」こと。迅速な行動がとれるようにする準備。「神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし」たのは、主上をいだし奉るためであり、また敵方にそれらを渡したくないのに加えて重要な点は、帝が行かれるところに帝位の象徴としての神璽・宝剣が必要だからである。

また、この段の教材としての魅力の一つに、二位の尼の言葉があり、その発言の説得力は見事である。三回の発言がある。

最初は、女房達に向かってなされたもの。

「わが身は女なりとも敵の手にはかかるまじ。君の御供に参るなり。御こころざし思いまゐらせたまはん人々は、急ぎ続きたまへ」

がその言葉だが、その中心は二文目の「君の御供に参るなり。御こころざし思いまゐらせたまはん人々（陛下に忠誠を尽くそうと思う方々）は、急ぎ続きたまへ」にある。この言葉が単独で言われ説得力を持ったためには、「君の御供に参るなり」が人々の心を打たなければならぬ。そのた

めには「君」の權威が無条件で女房達に認められていることが前提となる。しかし、二位の尼は、この条件だけでは不十分と考えたのか、それを補うための工夫をしている。一文目の「わが身は女なりとも敵の手にはかかるまじ」を付け加えたのである。では、この言葉が付け加わればどうなるか。この言葉は「君」の權威とは無関係である。武士の妻、身内という立場からの決意表明になっている。武士は死に直面して「敵の手にはかかるまじ」という覚悟が要するのは常識であるが、「わが身は女なりとも敵の手にはかかるまじ」という言葉には、女性の身であつても武士の覚悟に近づくことが美德であるという判断がある。また、その判断が他の女房達にも、死に臨んでの決意を促すに違いないという思いがある。二位の尼の言葉に従えば、決意の少ない女房でも我が身を振り返ることなく死に臨めるという効果が生まれてくるのである。二文が重なることによつて、説得・勧誘の効果が倍増する仕組みになっている。

彼女の二回目、三回目の発言は後で検討するとして、文脈に沿つて分析を深めたい。

「主上、ことしは八歳にならせたまへども、御年のほどよりはるかにねびさせたまひて、御かたちうつくしく、あたりも照り輝くばかりなり。御髪黒うゆらゆらとして御背中過ぎさせたまへり。あきれたる御さまにて、『尼せ、われをばいづちへ具してゆかんとす

るぞ』と仰せければ」

にある「主上」の姿をとらえたい。ここには、聡明さと美しく愛らしい主上の姿が述べられている。「ことし八歳にならせたまへども、御年のほどよりはるかにねびさせたまひて」という主上の聡明さは、後述の内容に関係するので注意をしておく必要がある。「御かたちうつくしく、あたりも照り輝くばかりなり。御髪黒うゆらゆらとして御背中過ぎさせたまへり。」には、主上の美しく愛らしい姿を具體的にイメージすることが大切である。帝の姿が美しく愛らしければ愛らしいほど、その死の残酷さが浮き彫りになる。

「あきれたる御さまにて」とは、二位の尼の「君の御供に参るなり」を受けている。帝は自分の立場が理解できていないのである。自分がどこそこに行くとは言っていないのに、尼は「君の御供に参るなり」と不思議なことを言う。それが「尼せ、われをばいづちへ具してゆかんとするぞ」という言葉になっている。

帝の言葉を受けて、二位の尼はこの幼い帝を説得しなければならぬ。しかも、死に臨んでの説得であるために失敗が許されないのである。「涙をおさへ、申されければ『君はいまだ知ろしめしさぶらはずや……』と泣く泣く申させたまひければ」とあるように、初めは気丈に涙をおさえ説明を始めた彼女ではあるが、最後は悲しみや同情のあまり涙ながらの説得となった。二回目の二位の尼の説得の言葉

は次の通りである。

「君はいまだ知らしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御力によって、いま万乗の主と生まれさせたまへども、悪縁に引かれて御運すでに尽きさせたまひぬ。まづ、東に向かはせたまひて、伊勢大神宮に御いとま申させたまひ、その後西方浄土の来迎にあづからんとおぼしめし、西に向かはせたまひて、御念仏さぶらふべし。この国は心憂き境にてさぶらへば、極楽浄土とて、めでたき所へ具しまゐらせさぶらふぞ。」

この二位の尼の言葉が、この本文中の圧巻である。幼い帝に向かつての説得の妙を十分味わっておかなければならない。

「君はいまだ知らしめされさぶらはずや」の対象は、「御運すでに尽きさせたまひぬ」である。まず、結論を提示する。覚悟を促そうという訳である。しかしながら、「御運すでに尽きさせたまひぬ」理由は、「悪縁」であり、安徳帝自らの責任ではない。また、帝位に生まれついたので「先世の十善戒行の御力によつて」であり、これまた安徳帝自らの意志ではない。前世の因縁によつて、帝位につき、帝位を去らねばならない。自分の意志ではどうにもならないことを言い聞かせているのである。反論できない点を、説得の根拠にしているところが見事である。「悪縁」には、「前世でおかした悪業が原因となつて」と「帝の外祖父に

あたる清盛の専横の縁につながつて」の解があるが、帝自らの意志に関係しないところで運命が決められるという点では両者共通している。

死への覚悟を促した後は、この世への別れに際しての準備と今から赴く世界の紹介である。「まづ、東に向かはせたまひて、伊勢大神宮に御いとま申させたまひ、その後西方浄土の来迎にあづからんとおぼしめし、西に向かはせたまひて、御念仏さぶらふべし」がその言葉である。自分の運命を定めたものが神であり仏であれば、神仏に礼を尽くすのが人の道である。「まづ、東に向かはせたまひて、伊勢大神宮に御いとま申させたま」うことを勤め、その後は「西方浄土の来迎にあづか」るよう「西に向かはせたまひて、御念仏さぶらふべし」と促すのである。これでこの世への別れに際しての挨拶は終わる。しかし、恐怖心を鎮めるためには、以上のことだけでは不十分と二位の尼は考える。死後の世界が光輝に満ちていなければならぬ。次の二位の尼の言葉が、幼い帝を納得させるのに絶妙である。この世とあの世を比較して、あの世の光輝ある様を紹介する。「この国は心憂き境にてさぶらへば、極楽浄土とて、めでたき所へ具しまゐらせさぶらふぞ」。実に見事な説得である。自分の意志とは無関係に死ななければならぬことは、言いようもなく「心憂き」ことであり残念なことである。その「心憂き」ことの支配する国を別れて、「極楽浄土とて、

めたき所へ具しまるらせさぶらふぞ」というのである。幼い帝を誠心誠意説得している二位の尼の悲愴な姿をとらえなければならぬ。

次いで

「山ばと色の御衣にびんずら結はせたまひて御涙におほれ、小さくうつくしき御手を合わせ、まず東を伏し拝み、伊勢大神宮に御いとま申させたまひ、その後、西に向かはせたまひて御念仏ありしかば」

は、二位の尼の言葉を聞いての安德帝の行動であるが、これが前に述べた「主上、ことしは八歳にならせたまへども、御年のほどよりはるかにねびさせたまひて」の部分と呼応している。帝の行動は二位の尼の説得を理解しての行動であり、彼女の要求通りの行動であるが、ここに「御年のほどよりはるかにねびさせたま」うた聡明な帝の姿がある。年齢以上に聡明な帝の姿が浮かびあがればあがるほど、運命の残酷さ・悲劇性が浮き彫りになってくる。作者の細やかな配慮が目につくところである。

「二位殿やがていただき奉り、『波の下にも都のさぶらふぞ』と慰め奉って、千尋の底へぞ入りたまふ」

が結末部であり、ここに二位の尼の三回目の発言がある。

【第一時】

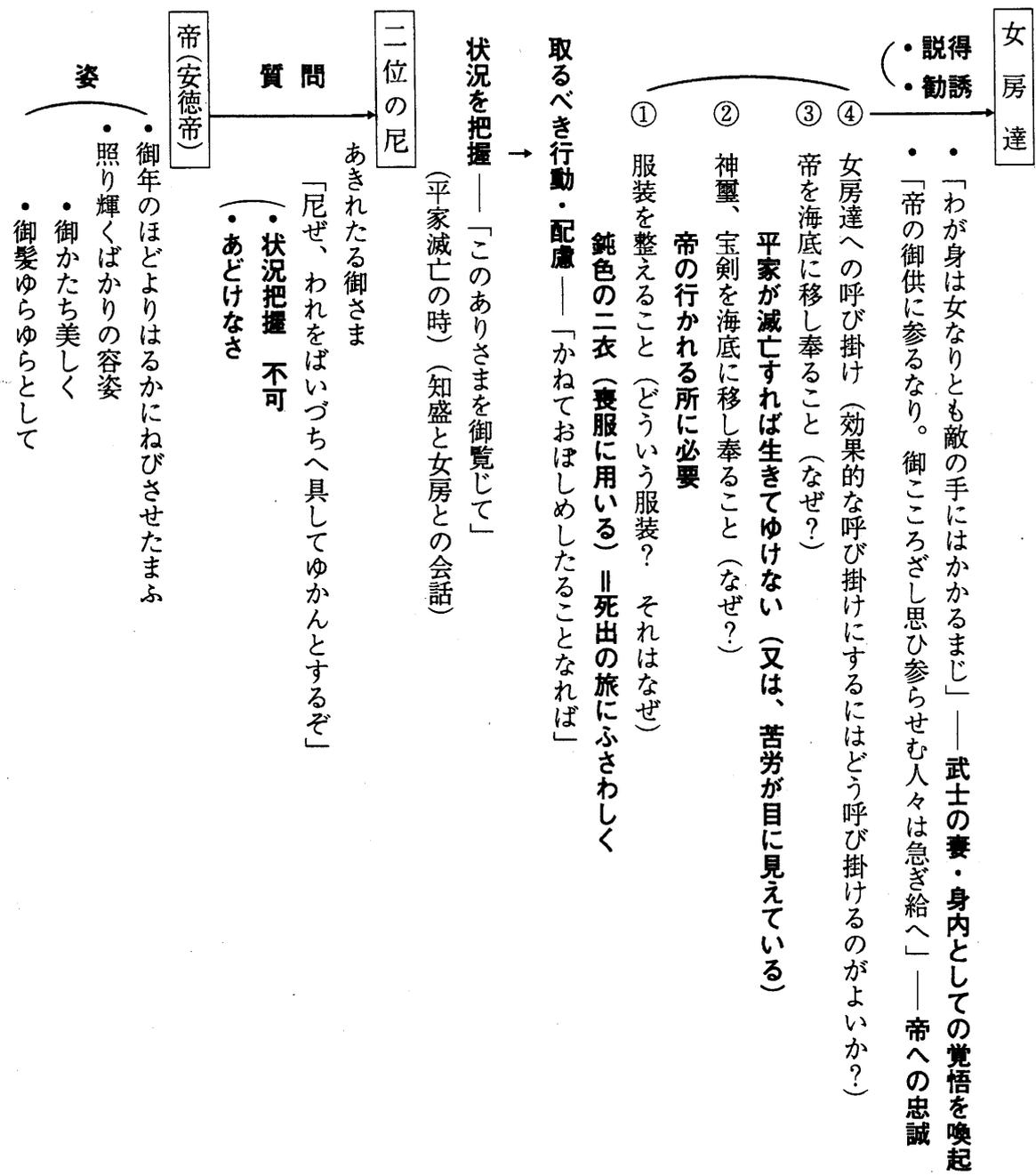
先帝身投げ 平家物語 卷十二

「波の下にも都のさぶらふぞ」とは、何と見事な慰めの言葉であろうか。安德帝にとって、都での生活は華やかで楽しい生活であったに違いない。平家一門の栄華、華やかな宮廷生活、思い出すだけで心が浮き立つものであったはずである。その都の生活に誘おうというのである。「千尋の底へぞ入りたまふ」て、悲劇の幕が下ろされる。

三

こういう教材を扱う場合、特に注意しなければならないのは、教材研究の所でも述べたように、登場人物の人物像（ここでは、二位の尼と安德帝の人物像）と会話・発言に込められた発言者の心理、並びに表現の絶妙さをおさえなければならぬ点である。これらを学習者が自分で、ないしは教師の発問のもとで説明・読読しなければならぬ。その説明・読読を通して、学習者の人間に対する認識や社会・歴史また言葉や表現に対する認識を育てるようにしなければならぬのである。

授業の全体が捉えやすいように、まず板書きを示しておきたい。内容面に注意すると二つに分けられる。



（太字は色チヨークを使用する）

〔第二時〕

先帝身投げ 平家物語 卷十一

II

二位の尼

4 入水

慰め (楽しい・めでたい生活)
「波の下にも都のさぶらふぞ」

妙

ウ 光輝ある来世への誘い

この世||心憂き境
あの世||極楽浄土
めでたき所

絶

イ 人の道

仏の世界へ何う挨拶 (西方浄土)
神への別れの挨拶 (伊勢大神宮)

ア 神仏の力

帝位につく||十善戒行の御力
帝位を去る||悪縁に引かれ

2 説得 (死の覚悟、失敗の許されない説得)

1 疑問||帝の幼さ・あどけなさ

「尼せ、われをばいづちへ具してゆかんとするぞ」

3 納得||「御年のほどよりはるかにねびさせたまふ」(帝の聡明さ)

・「涙におほれ」(悲運察知)

帝の聡明さ

・「伊勢大神宮に御いとま申させたまふ」

・「西に向かはせたまひて御念仏あり」

(説得受け入れ)

4 入水

帝(安徳帝)

(太字は色チヨークを
使用する)

四

第一時

指導目標

配当時間は、二時間位が適当であろうか。第一時は前半部の読解と後半部の概略をとらえさせ、第二時は後半部の読解ということになろう。
次に学習指導案を示す。

第一時の指導過程

| 学 習 活 動 | 指 導 上 の 留 意 点 |
|---|---|
| <p>1 本時の学習目標を明らかにする。</p> <p>2 本文を通読する。</p> <p>3 平家一門の置かれた状況を把握する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・窮地に追い込まれた平家の人々の姿をとらえることを明らかにする。 ・一応全文を二名に指名読みさせる。 ・通読後、冒頭から「あきれたる御さまにて、『……』と仰せければ」までを扱うことを告げる。 ・「二位殿」とは、平清盛の妻であり、帝の祖母にあたることを説明する。 ・「二位殿は、このありさまを御覧じて」が、平家一門の滅亡の場面であることを説明する。 |

1. 窮地に追い込まれた平家の人々の姿をとらえさせる。
2. 二位の尼の死に臨んでの配慮の細かさや女房達に死の覚悟を促す説得の見事さをとらえさせる。
3. 状況が把握できない帝のあどけない姿と照り輝くばかりの美しい姿をとらえさせる。
4. 二位の尼の説得の見事さを通して、学習者に言葉に対する認識を深めさせる。

4

死に臨んでの二位の尼の配慮の細かさ
と女房達に対する説得のうまさをとらえる。

(1) 平家滅亡に際しての二位の尼の覚悟を
とらえる。

(2) 配慮の実際をとらえる。

ア 四つの点に配慮していることをとら
える。

イ それぞれ、どういう配慮であるか、
その内容と理由をとらえる。

(3) 女房達への呼び掛けの見事さととらえ
る。

ア 呼び掛けの中心が、どこにあるかと
らえる。

イ 「わが身は女なりとも敵の手にはか

・ 「日ごろおぼしめし設けたることなれば」に二位の尼の覚悟が述べ
られていることをとらえさせる。

・ 「日ごろ」に注目させ、長い時間を掛けて取るべき配慮・行動を考
えていたことをとらえさせる。

① 「鈍色の二衣うち被き、練袴の稜高くはさみ」

② 「神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし」

③ 「主上をいだし奉って」

④ 「わが身は女なりとも……急ぎ続きたまへ」
の四点であることをとらえさせる。

①は、「服装を整えること」であり、死出の旅にふさわしくがその
理由であることをとらえさせる。

②は、「神璽と宝剣を海底に移し奉ること」であり、帝の行かれる
所に帝の象徴としての神璽と宝剣が必要であることをとらえさせ
る。

③は、「帝を海底に移し奉ること」であり、平家滅亡後帝だけでは
生きてゆけないことをとらえさせる。

④は、「女房達への呼び掛け」であることをとらえさせる。

・ 「帝の御供に参るなり。……急ぎ給へ」にあることをとらえさせる。

・ この言葉は、武士の妻・身内としての覚悟を述べていることをとら

「かまじ」を検討する。

ウ 「わが身は女なりとも敵の手にはか
かるまじ」という言葉がある場合とな
い場合の呼び掛けの効果を検討する。

5 状況を把握できない主上のあどけない姿
をとらえる。

(1) 主上の紹介が二点にわたることをとら
える。

(2) 主上の姿をイメージする。

(3) 主上の「あきれたる御さま」をとらえ
る。

6 次時の予告を聞く。

備考 教材は傍注資料を使用する。

えさせる。

• この言葉が、女房達に与えた効果について考えさせる。

• 女であっても、武士並の覚悟を持つことが自分の美德になることを
とらえさせる。

• 「帝の御供に参るなり……」だけの場合は、帝に対する忠誠心だけ
の説得になることをとらえさせる。

• 「わが身は女なりとも……」の言葉があれば、死への覚悟が生まれ、
帝への忠誠心が容易に受け入れやすいことをとらえさせる。

• 年齢以上に聡明な点と照り輝くばかりの容姿を持つ点の二点をとら
えさせる。

• 「御年のほどよりはるかにねびさせたまひて」の「はるかに」、ま
た「御かたちうつくしく、あたりも照り輝くばかり」「御髪ゆらゆ
らとして、御背中を過ぎ」るあたりに着目させる。

• 「御年のほどよりはるかにねびさせたまひて」は次時に関係するの
で注意するように指示する。

• 「あきれたる御さま」の意味を確認し、どうしてこういう反応にな
るのか、主上の気持ちを考えさせる。

• 状況の把握ができていない帝の姿をとらえさせる。

• 平家一門の滅亡の姿をとらえさせることを告げる。

第二時

指導目標

1. 平家一門の滅亡のため、死出の旅に赴かざるをえない帝に対する二位の尼の説得の絶妙さをとらえさせる。

2. 二位の尼の説得を受け入れる帝の聡明さをとらえさせる。
3. 平家一門の滅亡の姿を通して、学習者に人間や歴史、状況と人間の関わりなどについての認識を深めさせる。

第二時の指導過程

| 学 習 活 動 | 指 導 上 の 留 意 点 |
|--|---|
| <p>1 本時の学習目標を明らかにする。</p> <p>2 本文を通読する。</p> <p>3 本文の基本構造を明らかにする。</p> <p>4 帝と二位の尼の会話に着目し、二位の尼の説得の見事さと帝の聡明さをとらえる。</p> <p>(1) まず帝のあどけなさをとらえる。</p> <p>(2) 帝に死の覚悟を促す二位の尼の説得の見事さをとらえる。</p> <p>ア どういう点に説得の絶妙さが表されているか、考える。</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 二位の尼の説得の見事さと帝の聡明さをとらえることを明示する。 • 教材の後半部を扱うことを告げる。 • 二名に指名読みさせる。 • 登場人物は、二位の尼と帝の二人であることをおさえさせる。 • 1 (帝の) 疑問、2 (二位の尼の) 説得、3 (帝の) 納得、4 (帝、二位の尼の) 入水を板書し、本文の流れを示す。 <p>「尼げ、われをばいづちへ具してゆかんとするぞ」という疑問の言葉には、事態を十分把握できない帝のあどけなさがあることをとらえさせる。</p> <p>• 幼い帝相手とはいえ、失敗の許されない説得であることを、まずはとらえさせる。</p> <p>• 説得の絶妙さが次の三点に表わされていることをとらえさせる。</p> <p>ア 神仏の力 イ 神仏への別れの挨拶</p> |

イ 説得の効果について考える。

ウ 内容の豊富さをとらえる。

(3) 帝の聡明さをとらえる。

(4) 帝に対する二位の尼の慰めの見事さをとらえる。

5 まとめを行う。

ウ 光輝ある来世への誘い

- 帝位についても帝位を去るのも、人知を超えた神仏の力によるところから説得していることに注目させる。
- なぜ「伊勢大神宮」への別れの挨拶をしなければならないのかを考えさせ、「伊勢大神宮」へのお札の気持ちであることをとらえさせる。
- 次に、なぜ「西に向かはせたまひて、御念仏さぶらふべし」なのかを考えさせ、今から赴く世界への挨拶であることをとらえさせる。
- 「この世」と「極楽浄土(あの世)」を比較している効果を考えさせる。
- 「この世」を「心憂き境」ととらえ、これから赴く世界の方に価値がある(「めでたき所」という説得の仕方に注目させる)。
- 「神仏の力」「神への別れと仏への近づきの挨拶」「来世への誘い」と広範囲の配慮であることをとらえさせる。
- 周到な準備であったことを、「日ごろおほしめし設けたることなれば」と呼応させてとらえさせる。
- どういう点が「御年のほどよりはるかにねびさせたま」うのか考えさせる。
- 「御涙におほれ」てはいるが、すぐに二位の尼の説得を受け入れていることをとらえさせる。
- 「伊勢大神宮に御いとま申させたまふ」「西に向かはせたまひて御念仏あり」の帝の姿をとらえさせる。
- 「波の下にも都のさぶらふぞ」の慰めの効果について、考えさせる。
- 帝にとつての都の価値について考えさせる。
- 二位の尼の発言が、説得から慰めに移っている点に注意させる。
- 状況と人間の生き様についてまとめを行い、平家一族の哀しみをとらえさせる。